二十三日。八木のやすのりといふ人あり。
四段・体　ラ変・終

この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。
打消「ず」体　四段・体　ラ変・未　伝聞「なり」終

これぞ、たたはしきやうにて馬のはなむけしたる。
係助詞　シク活用・体　完了「たり」体　サ変・用

守柄にやあらむ、国人の心の常として、
断定「なり」用　推量「む」体　ラ変・未

「今は。」

とて見えざなるを心ある者は恥ちずになむ来ける。
打消「ず」体　伝聞「なり」体　打消「ず」用　係助詞　過去「けり」体　ラ変・体　上二・未　カ変・用

これは、物によりて褒むるにしもあらず。
下二・体　打消「ず」終

二十四日。講師馬のはなむけしに出でませり。
サ変・用　下二・用

ありとある上下、童まで酔ひ痴れて、一文字をだに
下二・用　副助詞

知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。
打消「ず」体　四段・未　四段・用　係助詞　四段・体

二十三日。八木のやすのりという人がいる。

この人は国に必ずしも召し使われる人ではないようだ。

この人が、厳かな様子で馬のはなむけをした。

国司（自分）の人柄であろうか、その土地の人々の心情として、

「今は、（お別れの時なので顔を見せない）」

と思って顔を見せないと聞いているが、誠意のある人は遠慮せずに来た。

これは、贈り物をもらったから褒めているわけではない。

二十四日。講師が馬のはなむけをしにいらっしゃった。

そこにいる高い身分の者も低い身分の者も、子供まで酔っぱらって、一という文字さえ知らない者が、その足は十の字に踏んで遊んでいる。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/